

沖澤と隠岐

ふるさとへの前奏曲

— 下 — 出前演奏会



「もし私が彼女たちのマネジャーで一昔前だったら、相談を受けても止めていたでしょう。今はキャリアの形成を優先させた方がいいって」。青い海と森の音楽祭で事務局長を務める入山功一が語る。

沖澤のどかと隠岐彩夏は自分たちの構想を形にするため、入山に相談を持ちかけた。入山は宮崎国際音楽祭やパシフィックミュージックフェスティバル札幌など国内有数の音楽祭を裏方として支えてきた人物だ。

現在国内で主要な音楽祭は30ある。成り立ちは、大成した演奏家を海外から招聘し、音楽の力で地域の活性化を図るものが大半だった。だが沖澤と隠岐の提案は、これまでの潮流を覆した。若い音楽家が提唱者となり、出身地で開催するという、これまでにない意図を持っていた。

一音で心にしみる瞬間を

本県初の凱旋（がいせん）公演でタクトを振る沖澤さん＝2023年4月（撮影・斎藤義隆）



レコーディングで透明感あふれる歌声を響かせる隠岐さん＝2022年11月©T. Tairadate

「何で青森なの？ 青森でやれるの？」。青い海と森の音楽祭の発表会見後、入山は都内で音楽業界の関係者に言われた。日本オーケストラ連盟の調査によると、国内のプロのオーケストラによる演奏会は年間約3800回、来場者は約370万人。約3分の1の団体が東京に所在し、専用の音楽ホールで日々演奏会が開かれている。一方、同連盟が行った都道府県別公演数の調査で本県は、21年、22年度ともに最下位。23年度は公演数7回で鳥取と並び45位だ。

格だ。「今年30回目の宮崎国際音楽祭でも、遠隔地で公演はしています。しかし、どうしても市内が中心になる。長距離の移動は演奏家にとって負担だし、主催者も準備が大変ですから」

「子どものころ、生のクラシック音楽を聴く機会は学校音楽鑑賞教室くらいだった。だから勉強の一環というか、教えてもらっているという感覚だった」と沖澤は振り返る。そうした思いもあって、23年に京都市交響楽団の第14代常任指揮者に就任してからはアウトリーチに力を入れてきた。「受け身じゃなくて、自分からいろんなことを感じてほしい。いい音って、一音聴いただけで、心にしみる瞬間がある。それはコンサート会場じゃなくても同じだと思う。とにかく水準の高い音を、できるだけいろんな方に聴いていただきたいんです」

今回、アウトリーチのスタートは東通村だ。沖澤のどか（指揮）、隠岐彩夏（声楽）、高橋洋太（コントラバス）、矢部達哉（バイオリン）、横山幸雄（ピアノ）、北田千尋（バイオリン）、鈴木康浩（ピアノ）、佐藤晴真（チェロ）の8人が、小さなバスに乗り込み片道2時間以上かけ、音声を届けに行く。会場となるのは学校や施設だ。「いわば本場の意味の手作りコンサートと言えるかもしれません」と隠岐は語る。「今後、県内全市町村を訪ねようとメンバーは意気込んでいます。音

（文中敬称略、この連載は加藤桃子が担当しました）